
素直になれなくて

篠原悠哩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれなくて

【Nコード】

N8285B

【作者名】

篠原悠哩

【あらすじ】

真藤滯^{しんどうれい}28歳。美人だけどちよつと意地っ張りでシャイなOL。恋愛にはおくてで浮いた話もない。幼馴染の春日^{かすがり}流星^{ゆうせい}は腐れ縁で、何かにつけて滯にからんでくる。そんなある日、滯の仕事の交渉相手として人気雑誌の編集者倉元が現れ…。きつとベタな大人なラブストーリー。

1# (前書き)

お立ち寄りくださり、誠にありがとうございます。

幼馴染をテーマに書いていたら、いつのまにかキャラが走り出し、あれよあれよと続編まで書いてしまいました。笑

現在、「素直になれなくて2」も連載中です。気に入ってくださいれば、是非続けてお楽しみいただければ幸いです。

では、最後までお付き合いください。

篠原悠哩

1#

「朝だよ！おはよ！…朝だよ！おはよ！」

ふとんの塊の中から細くて華奢な手が伸びる。

「わかったって！」

不機嫌そうにつぶやくとバンバンとベッドサイドのテーブルを叩きながら手探りで時計を探す。

お目当ての時計の手応えを感じると茶色いクマの頭にあるボタンをバンツ！と投げやりに叩く。かわいそうに目をキョロキョロさせながら朝の到来を告げていたクマは無残にもテーブルから叩き落とされた。その瞬間、静かになる。

しばらくして布団の塊は大きくため息をつくともぞもぞと動き出した。やがてぱっと布団を勢いよく跳ね上げると、中から現れたぼさぼさの髪の少年、もとい、れっきとした大人の女性が正座した格好で眠たい目をこすりながら天井に手を伸ばして大あくびをした。

「ふああゝっ！」

そしてしばらく呆然と一点を見つめる。

しんどうれい
真藤 滯 28歳。

はっとするぐらいの美人なのに、男運がない恐ろしく奥手なOLである。

滯はあまり朝は強くない。目が覚めてからしばらく寝ぼけてボーっとしているのが日常だ。そのままの姿勢で目を開けながら眠ってしまうこともある。あやうく寝坊しそうになるのだが、いつもダメ押

しで携帯で起こされる。

今日も一瞬、意識を失いかけたところで携帯の着信音がけたましく鳴り響く。漑ははっとして目を見開くとテーブルの携帯に手を伸ばした。

「いつまで寝てんだよ！遅刻するぞ！なんなら寝込み襲いに行つてやつてもいいんだけど？」

長年聞きなれた声が電話の奥で笑っている。

「遠慮しときます。おきりゃあいいでしょ！流星^{りゅうせい}のどエッチ！」

カチンときて少し呂律がまわらなさそうな喋りで不機嫌そうにとりあえずやり返すと、勢いよく切る。毎朝の日課である。

春日流星^{かすがりゅうせい}は同級生にして隣に住む腐れ縁の幼馴染。成績や得意科目も似た二人は高校も同じ、大学も学部こそ違えど、同じ学校となった。腐れ縁はそこまでかと思いきや、今勤めている化粧品メーカーの採用試験会場でも偶然にも出くわし、めでたく合格して二人は同僚となり、現在に至る。さすがに部は違うが、皮肉なことにフロアは同じなのである。そのせいか、小学校の時からほぼ習慣化した漑を起こすのが、そのまま流星の日課となっている。もちろん、昔は窓から起こしにやってきたのだが、大人になってからは漑が窓をきっちり閉めるようになったので、いつからか携帯になった。

漑はまだ目覚めきつてない体を引きずりながら階段を下りると、母の作る味噌汁と玉子焼きのいい匂いに急に頭がはっきりして来る気がして、条件反射のようにダイニングキッチンに顔を出す。

「ああ、滯、おはよう。早く支度しなさい。遅れるわよ。」

滯をそのまま小さくしたような母が忙しく動きながらちらっと滯に視線を向けて笑った。

「はーい。」

とやり過ぎそうとして一瞬ぎよっとする。流星が父の傍らに座り、クスクス笑っていた。

「おはよう。寝坊助。早くしろよ。先に行っちゃうぞ。」

流星が清々しい笑顔を滯に向けてくる。滯は真っ赤になりながら、すぐ傍の洗面所に駆け込んだ。

「なんであんた、こんなに早いのだよ！」

寝起きのぼさぼさ頭のだらしない姿を見られたことに羞恥しながら、焦っていらだたく洗面所から怒鳴った。

「べつに。早く起きたから支度が早くできただけ。おまえとちがつて優雅な朝食を楽しむためにたまには早く起きるのさ♪」

そう流星がやり返す。その傍らで新聞を読みながらそのやり取りに笑っている父の声が聞こえる。滯は大きくため息をつきつつ、さっさと顔を洗って髪を整えた。

流星は、隣の家で1人暮らしをしている。正確には10年前に父親を単身赴任にさせたくない流星の母が父親の転勤についていつて

しまつて、高校を卒業すると同時に自分の家で1人暮らしとなつていた。漣の両親も、もともと地元で、流星の両親と4人は幼馴染なこともあつて、流星の面倒を見ることを気持ちよく請け負つたのだ。どうせ、学校も同じなんだしということ、現在に至る。言わば春日家とは家族同然の付き合いだった。

おまけに何かにつけてやり合う二人のやり取りを見るたびに漣の両親は、

「本当の兄妹みたいね、あんた達」

と目を細めるだけで、漣の気持ちは一切無視だった。漣にとってはいい迷惑である。家の中を自由に動き回る流星には隠し事はできない上、漣の両親も何も疑わずになんでも話す。その結果、流星は漣のことなら知らないことはなかったというより、本当に家族同然でこの家のことで流星が知らないことはまずないといつても過言ではない。

ただひとつ、漣が誰にも言わずにひた隠しにしていることを除いては…。

漣はバタバタと2階に駆け上がり、化粧をすばやくして身支度を整えると、顔つきもきりつとビジネスパーソンの顔になる。もともと知的な美人だったので、少し化粧するだけで漣の綺麗さはひどく磨かれる。少し中性的で禁欲的な雰囲気を持ち、非の打ち所がないような知的でクールな容貌はいかにも仕事が出来そうなやり手のビジネスパーソンに見える。漣は完璧に支度を整えともう一度階段を下りてダイニングに改めて顔を出す。

「やあ、真藤漣サマ。おはようございます。今日もお美しいですね。

」

流星はそう言ってけらけら笑う。

流星おまえ、一回殺してやる！ 滯はむっとしながらもバツが悪そうに流星をちらっと見ていかにも不機嫌そうに挨拶した。

「おはよ。なんなのよ、その言い方。」

「いやあ、クールで完璧な真藤滯サマの、マル秘実生活を見られるのも俺だけだよなあと思って。」

そう言ってクスクス笑いながらのんびりご飯を食べている。その様子になんだか腹がたって滯が噛み付く。

「流星！ 会社で変なこと言わないでよ！」

「朝が弱くてぼけまくってるのか？」

「流星！ あんたねえ…！」

その瞬間滯の味噌汁を持ってきた母が口を挟んだ。

「滯！ 遅れるわよ。さっさと食べなさい。」

母の声に滯は時計を見る。やばい、ほんとだ。時間がない状況を把握して無言でご飯を駆け込む。流星が涼しい顔してクスクス笑っている。ゆっくり食後のお茶に手をかけた流星にキッと睨みをきかせるとその後は食事に集中した。

「あ、お父さん、時間ですよ。」

流星は傍で新聞を広げて読んでいた例の父親に声をかける。

「お、おお。そうだな。」

のんびり席を立つと玄関に向かった。その後を追うように母が父親の鞆を持って走って行った。すでに、食事も終盤になっていた漑は母の後姿を渋い顔して見送る。

「鞆ぐらい自分で持っていけばいいのに。」

「いいじゃない。お母さんはうれしそうなんだから。俺もあんな風に尽くしてくれるかわいい人が嫁に欲しいなあ。なあ、漑？」

涼しい顔して厚焼き玉子を無心にほおばる漑を覗き込んでくる。漑はその返事にも何かいってやろうかと思ったが、時間がないので無視することにした。食事が終わると洗面所に駆け込んでも言う一度歯磨きをして口紅をつける。最後に鏡でチェック。

「よし、完璧！」

そういつてニツコリ笑って振り返るとそこに流星が立っていて、広い胸に思わずぶつかりそうになる。

「確かに完璧な美人だな。俺は化粧しなくてもきれいだと思うけどね。」

流星がよろめきそうになった漑の腕を掴みながら済まして見下ろしている。

「なんなのよ！びっくりするじゃない！人の後ろに急に立たないで
っていつも言ってるでしょう？」

滯はドキドキして体が熱くなるのを隠すように掴まれた腕を強引に
引き戻して睨みつけた。

「そんな感情的に突っかかれるとそそられるよね。キスしたくな
る♪」

意味ありげに色気たっぷりの目をして笑って顔を近づけてくる。
流星の美しく端正な顔が間近にセマった。思わず、腰が抜けそうな
ぐらいにぐらっとくる。それでもなんとか体制を立て直すと一発流
星の鳩尾に食らわした。

「うっ…。」

流星がうずくまっている間に横をすり抜けるとダイニングに置いて
あったバッグを握り締め、玄関に向かった。

「いってきまーす。」

玄関で父親の見送りを済まして戻ってくる母親に声をかけて足早に
出かける。

「あら、流星くんは？」

「知らないわよ。あんなバカ！」

母に振り向きもせずに捨て台詞のように吐き捨てると、そのまま駅

のほうへと足を向けた。どうせ、駅まで行く間に追いついてくるのだ。

流星は身長180センチはある。学生時代はバレー部で鍛えた所為か、手足が長く、がっしりしているのに大柄な感じは受けない。いたってスマートでエレガントな男だ。さらに、妙に華やかで色気があるのでどこにいても人目を惹く。もちろん学生時代もファンクラブができるほど、女の子に人気だった。

今も会社や取引先ではモテモテで、女の噂が耐えない。昔から、とっかえひっかえ女を替えている。しかも、憎たらしいことに面食いでもあるため、美人揃いだ。流星は口もうまいし、顔もいい。そんな綺麗で色気のある男にマジに口説かれればほとんどの女はイチコロである。

厄介なことに流星は大人になると、時々さつきみたいの色仕掛けで濡をからかったりするようになったのだ。

濡はそんな流星を腹ただしく思いながらも、時々どぎまぎして真に受けそうになる。そんな自分に自己嫌悪しながらも今日まで腐れ縁の幼馴染を続けている。

「ばかだね、流星はからかってるだけなんだから。本気にしちゃだめよ。」

そう言い聞かせると、後ろから流星が追いついてきたのに気付いて、小さくため息をついた。

2# (前書き)

1#の誤字・脱字や文章を修正しました。読みにくかった点をお詫び申し上げます。

2#

カチャカチャカチャ

細長い白い指が滑らかにキーボードの上をすべる。

「先輩、朝から仲いいですネエ。」

四角いインテリ風の眼鏡をピクッと動かして隣の後輩、飯田にチラッと視線を投げる。

「なんなの？飯田君。誰のこと？」

そう答えながらも漣の指は滑らかに動いている。飯田も視線はPCの画面にはりついたまま、キーボードを打ちながら話しかけていた。

ここは、マーケティングMK部である。漣はメイクの人気ブランドを担当をしている。漣はこの2つ年下の飯田と組んでいる。頭が切れてなかなか気の利いた男なので仕事のコンビとしては最高だった。今は半年後の新製品のMK計画の幹部へのプレゼンが近いため、このデスク周りではピリピリとした空気に包まれている。

前回の新色は、はずれこそしないが、どこで漏れたのか、ライブルのH社に発売日を同日にされて、斬新な打ち出しをする予定が、半分ぐらいを持っていかれたのだ。今回はそのビハインドがある。それだけに幹部も手厳しく出てくるであろうことは目に見えていた。

「何言ってますか。毎朝、春日先輩と仲良くご出勤。妬けますネエ。」

「はっ？」

痛いところをつっこまれて入力ミスをする。それに気付かれないようにすました顔でやり直した。飯田はそれに気付いているのか口元で笑いながら済まして画面を見ている。

「今朝は特に仲がよかったですよ。電車の中なんか、とっても。」

滯はそう言われてかーっと顔が熱くなってさらに焦る。それでもすまして何事もなかったかのようにポーカーフフェイスで画面を見て指を動かし続けている。

二人が通勤に使っている電車は一番混み合う区間で、今朝は滯が押されて扉近くの角に押し込められた。それに覆いかぶさるように体をピタッと密着させて流星が目の前に立っていた。滯も女性なのに170cmと長身なため、流星が覆いかぶさるようになって息がかかりそうなくらいのところに顔が来る。その上、流星はこのときとばかりにおもしろがって色仕掛けをしてくる。まるで抱き合っているみたいだとか、キスしそうだとか、じっと滯をみつめて言うから始末が悪い。この男はからかっているだけだと言い聞かせて必死に自分を保っていた。どきどきして体が熱くなるのがばれないようにするのが精一杯で精神的にゆとりなんかなかった。

本当は流星が好きなのだ。もう、昔からずっと。

でも、流星が連れて歩く女の子は美人でかわいい、滯とはまったく違うタイプの女っぽい感じの子ばかりだった。滯もはっとするぐらいの美人だが、中性的で美少年ぽいのだ。クールでひんやりする

ような上品で気品がある瞳に、口紅をつけていなくても真っ赤でやわらかそうに見える唇は白磁のように綺麗な肌とのコントラストがひどく鮮烈にうつる。人を惹きつけるような色香は十分あるのだが、告白されたり、ラブレターをもらったりしてくるのは女の子ばかりだった。しかも、いつも決まって「王子様みたい」といわれるのである。要するに白馬に乗ったエレガントで超美形の王子様に見えるらしい。宝塚のイメージだ。もちろん漣にはそんな気はさらさらないので丁寧に断ってきた。

漣は幼い頃からずっと流星だけを見てきた。それでも、年頃になって流星がいろんな女の子をとっかえひっかえしだすと、何度か流星を諦めようと思った。その度に毎日間近にいる流星を見ると、そんな決意も一瞬にして揺らいでしまうのだ。本当は流星の新しい彼女の話が浮上するたびに、傷ついているのだが、この関係を崩したくないがために、本当のことが言えずについ意地を張ってしまう。

こんなに近くにいるのに、いったい自分は流星のなんなんだろうと時々真面目に考えてみる。

しかし、その答えはいつも、ただのお隣の兄妹みたいな家族同然の幼馴染である。漣は、もう10年以上もそんな悶々とした日々を過ごしていた。当の流星はそんなこともまったく知らずに能天気にあいかわらず女をしょっちゅう替えている。

「やあね、見てたの？混んでいたからしょうがないでしょ？」

そういつてなんとか平静を装ってやり返す。

「そうですか？？なんだか恋人同士の熱き語らいつて感じでしたよ。お二人とも。」

飯田がにやにやして言う。と、澤はまた入力ミスをした。思うようにいかずにイラついて大きくため息をつく。とキーを荒っぽく叩いて、飯田に振り返った。

「飯田君、いい加減にしてよ。仕事の邪魔しないで。明日プレゼンなのよ。今日つめないといけないんでしょ？あなたの方は間に合うの？」

そう囁み付いた瞬間、おそろおそろ事務スタッフの女性が近づいてきたのに気付いた。澤は飯田に投げかけるつもりだった言葉を飲み込んで、かけていた眼鏡の四角いレンズ越しにその若い女性の顔をじろっと見上げる。もともと恐る恐る近づいてきたのが、さらに飛び上がりそうに怖がっている。

「何？何か用でも？」

澤は会社では恐れられている。もちろん身近なスタッフにはそんなことはないが、仕事ができる上、見かけはいたってクールで気が強そうな知的美人である。笑わないとかなり怖いらしい。もともと、もともといつもポーカーフフェイスで笑うことはめずらしかった。仕事に厳しくて誰が相手でも徹底的という噂だけが先行して周りに定着してしまったのである。ただの照れ隠しなだけなのだが、真顔だと誤解されやすいのだ。

「あ、いえ、この資料を届けるようにと木村マネージャーから頼まれてまして…。」

「木村マネージャーから？」

木村とは澤の上長でブランド担当マネージャーだ。メイクブラン

ドは3つあってそれをすべて統括している。漣が担当するのはその中でも核になる20代〜30代に向けた先端のトレンドを引っ張るブランドである。漣はいぶかしげな顔をして資料を受け取って内容をざっとみる。途中何かに気付いてじっと見る。その様子を黙って見ていた女性はどうかとそわそわしていた。ふと、漣が顔を上げて、わかったわ、ありがとうと声をかけると、用事がすんだとばかりにあわててお辞儀をしてそそくさと去っていった。

「先輩怖がられてますね〜。」

また、飯田が笑っている。この飯田は見た目はいかにも頭も育ちも良いですといわんばかりのなかなかの好青年で、大学も学部は違うが同じで、バレー部で流星の後輩だったのだ。流星と気が合うのか、時折、学校の中で一緒にいるところに何度か出くわしていたので、話もしたことがある程度に知り合いだった。流星からどんな風に聞いているのかは知らないが、この男だけはまったく構えず接してくる。不思議と気を使わなくてもいいので、漣にとっては楽な相手だった。時々流星とのことを冷やかされる以外は…。

「いい加減…。」

飯田に一言クギを刺そうとするとまたもや邪魔が入る。漣のデスクの電話がけたたましくなった。はあ、とため息をついて受話器をとる。

「はい。真藤ですが。…はい、…はい。わかりました。すぐに参ります。」

受話器を置くと漣はすっと立ち上がった。

「ちょっと、集倫社のV誌の担当者と打ち合わせしてくるわね。今日はランチも一緒にしてくるから遅くなるわ。クノチアキの件たのんだわよ。今日中に必ず確約とってよ。」

「大丈夫ですよ。ほぼ確約までいってますから。向こうも乗り気ですから午後にはハッキリします。いつてらっしゃい。」

飯田はニッコリわらって滯を送りだした。しかし、飯田は滯がいなくなるかとすかさず、メールを立ち上げて何やら猛スピードでうっている。送信ボタンを押すと遠くなった滯の後姿に大きくため息をついた。

3#

「やあ、真藤さん、おはようございます。今日も綺麗ですね。」

クラモトケイスケ

倉元圭祐はさらっと言うとさわやかな笑顔で握手を求めてきた。倉元は帰国子女らしく、永くアメリカで生活していたせいか、習慣的に日本人との違いを感じて時々驚かされる。漣は一瞬惑ったが、営業だから仕方ないとばかりにやや遠慮がちに愛想笑いでその握手に応じる。

今回の企画は漣たちにとっては前回のリベンジがかかっていた。V誌はまだ創刊から数年だが、既にに常にトップセールスを記録し、今では感度のいい女の子たちからはバイブルのように圧倒的な支持を受けている。V誌のモデルはドラマや映画にもひっぱりだこで、カリスマ的存在となり、他の雑誌とは一線を画していた。今回、熱心にアプローチした結果、なかなか取れないタイアップを獲得できそうなのだ。しかし、まだ確約を取ったわけではない。そうがあつて相手の気をそこねるともこうもない。そう思うと苦手な笑顔もなんとかなった。

倉元は漣に清々しい笑顔を向けて、力強く漣の手を握り締めると、すつと促された椅子に座った。

「朝からわざわざご足労いただいて申し訳ございません。今の時間しか打ち合わせに避ける時間がなくて……。」

漣は申し訳なさそうにお詫びをしてから倉元の前に座る。

「いいえ、真藤さんにお会いできるんですしたら、何時でもかまいま

せんよ。」

漣の目を捉えるとじっと見据えながらもさらっと倉元は言い放つ。

「はあ…。」

漣は一瞬困ったような顔をしたが、すぐに気を取り直して仕事の顔になった。

「あの…、早速、今回のタイアップの件なんですけど…。」

真顔で話しかけた漣をじっと見て倉元がクスクス笑っている。

「あの…？ なにか？」

「いえ、あなたが余りに素敵なので見とれてただけですよ。先ほどの笑顔もステキでしたけど、こうしてお仕事の時に見せる顔もステキですね。」

そういうと再びじっと熱い視線で漣を見つめてくる。

倉元は年頃は30過ぎぐらいの元モデルで今は人気ファッション雑誌の編集の仕事をしている。実際、このV誌の人気は倉元圭祐のプロデュースというのも看板になっている。倉元は3年前まで超人氣モデルだったのだ。突然引退してこの雑誌の編集に携わっている。

倉元はダークスーツにストライプのシャツでシンプルないでたちだが、どこかセレブの青年実業家のような雰囲気をもっていた。流星をエレガントで綺麗な男というなら、倉元は男っぽくラテン系の情熱的なタイプの妖しい色気を放っていた。堀の深いやや薄

くグレーに光る瞳で熱く強烈にじつと漑を見つめてくる。

漑はこの倉元が苦手だった。今まであからさまに男の色気を感じたことはなかったが、倉元はフェロモンがあふれているような男で、初めて会ったときから熱っぽい視線を向けてきて漑を困らすのだ。

「あの…、すみません、お話を続けても…？」

戸惑うように上目遣いで聞くと、倉元はニッコリ特上の笑顔で大きく頷いた。

「このタイアップですが、わが社といたしましても、どの雑誌よりもV誌にかけております。

他では同じ月のタイアップはおこないません。しかも、発売前ですのでできるだけページ数の確保と良いポジションをお願いしたいと思っています。」

「そうですね。でも、いつもお話させていただいておりますが、それはプレス発表の時に最終は決めさせていただきます。」

倉元はやんわりと牽制してくる。さすがは交渉上手である。一筋縄ではいかない。元モデルといっても、ただの看板ではなくて実際の手腕を買われて仕事をしている。現にこのV誌は倉元が担当するようになってトップセールスを記録するなど、業界No.1にのしあがった。

漑が倉元のその答えを待ってましたとばかりに微妙に口元で笑って受けて立つ。

「そうおっしゃると思ってました。ですから、こちらのネタを明か

してしまうと、今人気急上昇のメイクアップアーティスト、クノチアキに契約を現在商談中です。モデルはV誌専用のトップモデルの森川クリスにお願いできないかと思ひまして……。それから、同じくメイクをクノチアキ担当で、表紙を現在うちのCM契約を勧めている大物若手女優結城ななえでお願いできないかと。クノチアキなら、今注目のアーティストでビジュアル系でもあります。メイクシーンの掲載や、ビジュアル写真&コメントも当然掲載可能となります。

また、CMは発売前のV誌発売の2日前から投入する予定ですが、V誌さんのターゲット層が見ているゴールデンタイムのドラマの合間と、夜の情報番組の合間、朝のニュース番組の間が主です。GRP量はまだ検討中ですが、どこよりも大量投入の予定です。幹部よりその確約は取り付けております。また、発売日には主要都市の駅ばりはいつもの3倍は準備してありますので、露出はかつてないほど高いはずです。V誌さんにとっても悪い話ではないのでは？」

漚が倉元の目をまっすぐ見つめてくる。純粹で強気な曇りのないクリアな瞳に倉元は満足気に笑った。

「わかりました。ずいぶんとうちを買ってくださるのですね。こんなに大手のおたく様からそのように手厚くしていただけるなんてとても感激です。ただ、もうひとつ。スペシャルサンプル企画かオリジナル企画などをつけられませんか。メイク品でサンプル、もしくはうちの誌だけの特別企画でオリジナル品のプレゼントなどあるといいですね。最近は斬新なことをしないとピンときてくれないんですよ。最近の読者は目が肥えてますからね。」

にやっと倉元が笑うと漚はこれにも堂々と受けて立つ。一步も惹かずに自信たっぷりに戻す。

「そうですね…。その件は検討させていただきますが…。今のところ、オリジナル企画としてクノチアキプロデュースのメイクブラシキットを限定販売で作る予定で進めておりますが、それをV誌さんのみの企画にして携帯メールで申し込むというのはいかがですか。もともとメイク小物では人気の高いクノチアキブランドと提携ですので、レア物ですから飛びつくと思いますよ。V誌さんがこの内容で確約をいただければ、V誌さんのみの企画として通してもかまいませんが。」

滯がじつと倉元の目をまっすぐにみつめてさらに強気に出てくる。いい顔だ、と倉元はニヤリとする。

タイミングがいいことに、さっきの木村マネージャーの資料にCM投入量の大幅な増量とV誌とのタイアップにかかる諸々の条件をのんでもいい許可を取り付けてきた内容がしるされていたのだ。それによって、滯は今日の交渉の切り札を手に入れたので強気なやり取りができる。

さらに、プレス発表はレジントンホテルのガーデンテラスが確保できたことが書かれていた。レジントンは最近出来て、著名人の中でも人気のスポットとなっている。ヨーロッパ風の造りでこじんまりしているが、シークレットパーティなどで使うことが定番になりつつあるホテルだった。そのガーデンはとりわけ美しくて人気のスポットだった。また、結城ななえとはほぼ確約済みで残すは契約のみで、正式に契約を交わすことが出来れば、プレス発表で、実際に結城ななえにクノチアキが目の前でメイクするSHOW形式での発表ができる企画となっていた。その詳細情報は次の手に使えるように、今回はにおわす程度で終わらせるつもりだ。

「へえ、それは魅力的ですね。いいでしょう。その線で行きましょう。」

倉元は上機嫌で頷くと持っていた手帳にメモしはじめた。そしてさりげなく腕時計に目を落とす。さすがは元モデルだけあって、クロノスイスを嫌味なく身につけ、さりげなく目を落とすしぐさはなんとも自然でスマートである。この倉元と言う男は自分の見せ方を知っている。やはりプロだと澤は妙に関心して倉元の様子を眺めていた。普通の女なら、こんなファッション雑誌から飛び出てきたような魅力的な男に熱い視線を向けられれば、天にも上る気持ちになるだろう。

澤にとっては、倉元は確かに垢抜けていて見栄えのいいセクシーな男で、観賞用には上等すぎるぐらいだ。でも、あらかさまに自分にその色気をぶつけられるとなると別だ。どうしても引き気味になる。それは、流星がからかって色仕掛けしてくるのをかわすときはまったく違う気持ちだった。

流星の色仕掛けは本気にならないように無理やり自分の気持ちを押さえ込んでやっと思いでやり過ごしているのだ。ともすればくらくと流星に心を持っていかれそうになるぐらい、危ういところでセーブしている。澤が倉元に視線をやったまま、ぼんやり流星のことを考えているとふいに倉元の声がそれをさえぎった。

「ところで、そろそろランチにまいりませんか。今後のスケジュールや細かいことはそちらでいかがですか？お昼にご一緒していただけると伺いましたのでこの近くにいい店があるので予約しておいたんですよ。」

「あ、はい。え？お店をご予約してくださったのですか？申し訳ございません。本来ならうちがしないといけないのに…。」

滯は念のためいくつか候補は挙げておいたが、倉元がグルメで自分で店の予約をすると聞いていたのでやはりかと胸をなでおろした。

「さあ、参りましょう。時間はよろしいんですね。」

「あ、はい。本日の予定はこの後、社内のみです。」

「そうですか、それはよかった。」

上品で色香のある笑に一瞬ゾクツとするが、仕事と思いなおして倉元の後に続いて部屋を出る。

部屋を出るときに後ろの滯に話しかけた途端、倉元が誰かにぶつかった。

「あ、失礼。」

そういつて倉元がぶつかった長身の男を見やる。

「いいえ、こちらこそ申し訳ございません。」

一瞬、男同士じっと睨み合う。滯は倉元がぶつかった相手を見て驚いた。流星だったのだ。しかも、倉元とじっと睨み合い、一瞬ピリつとした空気が流れる。

「流…！」

慌てて、流星の名前を呼びそうになって飲み込んだ。

「倉元さん、大丈夫ですか？」

滯に呼ばれて倉元が流星から無理やり視線を剥がし、はっと振り返る。

「えっ？あ、はい。大丈夫ですよ。では、まいりましょうか。」

「はい。ああ、申し訳ございませんが、1階のロビーで少しお待ちいただけますか？バックと上着を持ってまいりますので。」

「ああ、失礼を。そうですね。では、ロビーでお待ちしています。」

その時にやはり、さっきよりも濃厚に熱い視線を滯に向けてニツコリと笑う。滯はひきつるように笑顔を返した。なぜか、後ろめたい気分になる。倉元はそんな滯の顔を名残惜しそうに見ながらエレベーターホールに消えた。

滯は倉元の後ろ姿を見送ると大きくため息をついて振り返ってはつとした。そこに流星が不機嫌そうに立っていたのだ。

「なに？」

「べつに。あんな男が好みなんだと思って。」

いつもすましている流星が射るような視線を向けて冷たく言い放つ。

「何いつてるの？仕事で商談してるのよ。おかしいこと言わないで。」

いつもふざけているのかなんのかわからないように涼しげに微笑んでいる流星しか見たことが

ないので、思いもよらない棘のある態度に、滯は戸惑いながらもいつものクセで突っぱねてしまった。そして無視して流星の横を通り

すぎようとする。流星が強く腕を掴んだ。

「ひっ！」

漚ははっとして思わず息を呑む。

「漚、あいつに気をつけろ。隙を見せるな。」

「はなして、痛い！」

漚が怪訝な顔で流星の顔を見上げる。一瞬、視線が絡み合う。流星の真顔がそこにあった。漚はなぜか胸がぎゅっと締め付けられた。しばらくして、誰かの足音が近づいてきたので流星は漚から手を離れた。

「いいな、なんでも仕事を優先させるな。いいか、わかったな！」

流星が厳しい口調で強引に漚を言いくるめる。有無を言わせない程の勢いに漚は無言で頷くしかなかった。流星はそれを確かめると、企画部のオフィスに消えた。

漚は流星から解放されてロビーに向かう間、左腕に流星の力強い手の感触が残っていて、なぜかじんじん痛むような気がした。漚は無意識のうちに自然にさするようにその腕に手を当てていた。心臓は驚くほど早く強く漚の胸を打ちつけている。はじめて見る流星の怒った顔を思い出して、漚はひどく不安な気持ちになった。

4#

ここは最近話題のイタリアレストランで、中の造りが複雑で、ところどころ個別のスペースが確保できるようになっているところが受けている。個室ではないが、いちいち入り組んだところに席を設けてあるので、互いの姿も見えないようになっていたため、プライベートな空間でゆっくりと食事ができるのだ。中庭があり、緑もたくさんあるので目もやすまり、明るく落ち着いた雰囲気が漂っている。また、ハーブはこだわりで、メニューにもふんだんに使われている上、専門のハーブ・コーディネーターも常駐しているので、客の注文に応じてアロマもある。ハーブに関連したメニューの多さから、女性には特に人気があった。

「ここ知ってます。最近話題のお店なんですよね。」

社交辞令のつもりで滞は倉元に話しかける。本当は倉元と二人でこんなおしゃれで落ち着いた空間で食事するのは非常に緊張するのだから避けたかった。倉元はそんな滞の思いとは裏腹に上機嫌で魅力的な笑顔をたっぷり滞に向けてくる。

「君を是非連れて来たかったんだ。二人で食事するチャンスを狙っていたからとってもうれしいよ。」

倉元は仕事ではなく、すっかりプライベートモードだ。言葉遣いや口調もどこかリラックスして親しげな感じで接してくる。はたから見れば、二人はどうみても恋人同士に見える。滞はどうやってこの先を乗り切ろうか、ひやひやしながら愛想笑いを返した。

「倉元さんはどこにいてもホテルでしょうね。黙っていてもステ

キなのに、お話もとってもお上手ですもの。」

漣はやんわり倉元を牽制してみる。

「そうでもないよ。本当に好きな人にはなか通じないみたいだけど？」

そういつてニツコリ笑って軽くウインクしてくる。

漣はドキッとして、一瞬真っ赤になったが、すぐに気を取り直して仕事の話題に切り替えた。しばらく倉元はクスクス笑っていたが、先ほどの商談の詳細の確認と今後のスケジュールについての確認作業をテキパキとこなした。倉元はやはり、頭が切れる。思いのほか早く終わって驚いた。

そして、料理がゆっくり運ばれてくる。相手が倉元だったので、緊張はしていたが、料理はことのほか漣の口にあった。

「おいしい…！」

漣の顔が一瞬ほころぶ。

「いいね。」

倉元が目細める。

「はい。とってもおいしいです。」

漣は倉元に思わず満面の笑みで答えてしまった。

「そうじゃなくて…。」

倉元はその表情に思わずクスクス笑っている。

「えっ？」

一瞬、滯があどけない草食動物のような目をしてぽかんと倉元の顔を上目遣いで見上げた。

「君のその表情だよ。僕にはそのほうがおいしいけどな。君は真剣に仕事の話をしている時もいい顔してるけど、そうやって少し表情がやわらいでいる時はもっとステキだね。」

滯はますます顔を赤らめて困ったような顔をした。

「さっきの彼、ほら、ぶつかった人。君の大事な人？」

「え？」

滯は唐突な倉元の質問に一瞬驚いた。

「ああ、流…いえ、春日ですか。申し訳ございません。失礼しました。春日とはそんな関係ではありません。」

「へえ、そうなの？彼は…君のこと特別におもってるんじゃないのかい？」

「あ…、えっ？ちっちゃがいます。そんな…！」

これまでの様子とは違って焦ってあわてて否定する。その様子に倉

元はクスツと笑った。

「勘違いですよ。彼はただの幼馴染で…。」

「幼馴染？」

倉元が食事をしていた手を止めて、漣の顔を見た。

「はい。家が隣同士で腐れ縁なんです。」

漣は苦く笑う。

「じゃ、なおさら君の事好きなんじゃないの？」

倉元は少し真顔で尋ねた。

「そんなはずありませんよ。兄妹みたいなものなんです。それに彼には綺麗な彼女がいますし…。」

漣はそう言葉にすると心にチクリと痛みを感じた。ついこの間会社の帰りに、セクレタリーセクションの一番の美人でかわいいと評判の彼女と二人で出かけていくのを偶然見かけた。最近、流星とその人は社内の子達の噂になっている。

「そうなの？」

倉元が一瞬ほっとしたような表情をした。

「はい。そうですよ。私のことなんてそんな風に思ってませんよ。」

「へえ、もったいないな。近くにこんなステキな人がいるのに。」

倉元は何か意味深な視線でじっと漣の目を見つめながら言った。

漣は目のやり場に困って、はずかしそうに下を向いた。

「君は誰か決まった人がいるの？」

「え？あ…、いえ、ない…ですけど。残念ながら。もてないんですよ。私。」

漣が苦笑いする。

「もてない？それは嘘だろ？君はすごく魅力的だよ。誰も声かけないのかい？君の周りの男の目はどうかしてるよ。」

「えっ？あの…、そういう冗談は私苦手なので、すみません…。」

漣は真っ赤になりながら苦笑いしてまた俯いてしまった。倉元はその様子に目を細めながら続けた。

「じゃあ、僕が立候補してもいいわけだ。」

「え…？」

漣は素っ頓狂な顔をして倉元の顔を見た。倉元はその顔を見てクスクス笑う。

「君は…なんかいいね。仕事的时候はクールで強気な顔してるのに、それ以外のこととなるとひどく純情でかわいい。ますます好きにな

る。」

「え…、あの…倉…元さん？」

滯はあまりに驚いて言葉を失って、顔を真っ赤にして思わず俯いてしまった。どう切り替えてよいものか皆目考え付かない。何か言わないともたもたしている間にウェイターがデザートをもってやってきた。滯はなんとなくほっとしたようにそのウェイターがお給仕する様子を黙って見つめた。ウェイターが去っていったのを見計らい倉元が話しかけた。

「このドルチェはおいしいよ。」

そう言って涼やかに笑いかけた倉元に心底ほっとして滯は笑顔で頷いた。倉元に促されてデザートを口にしたが、滯には味よりもさっきの倉元の言葉が耳に焼き付いて楽しむどころではなかった。最後にコーヒーを飲んで食事を終えると、倉元が時計を見た。

「ああ、残念だ。君ともう少しゆっくりしていたかったけど、次の予定がせまってるんだ。」

申し訳なさそうに倉元が口を開いた。

「あ…。申し訳ございません。お引きとめして。こちらで支払いをしておきますので、どうぞお先にお出かけください。」

そう言って伝票の閉じてある革のケースをとろうと立ち上がった。倉元がすかさずその手をすっとさえぎるように握った。一瞬、滯ははっとする。

「僕が払おう。君と楽しい時間が過ごせて楽しかったしね。」

倉元はニツコリ笑いながらもまだ滯の手を離さない。

「え？そんな、今日はうちで持たせていただきます。」

滯もひかない。もともと、ランチでもといったのはこちらの接待のつもりだったのだ。

「いいよ。これは君の会社やうちの社で払いたくないんだ。僕が個人で払うよ。君とまた会いたいしね。」

「え？そんな…、困ります。倉元…。」

滯が言い終わらないうちに倉元が掴んでいた滯の手をぐっと引き寄せて滯の唇を軽くふさいだ。

倉元の身につける香にふわっと包まれて一瞬頭が真っ白になる。これ…、エゴイスト？…流星と同じ…。日本人には使いこなすのは難しい香だが、倉元にも似合いの香だった。もちろん流星にも。でも、なぜか、倉元と流星はまったく違うように感じた。同じ香がするのに何かが違う…。

ぼんやりそんなことを考えていた滯は、はっと我に帰るとあわてて倉元から逃げる。倉元はクスクス笑っている。

「何か、初々しくていいね、その反応。仕事のとときのギャップがたまらないな。僕とまた会ってくれる？仕事抜きで。」

滯は呆然としていて言葉を失い、返事ができなかった。

「何もいわないということはOKとみなすね。」

そう嬉しそうに答えると倉元は滯をともなって店の出入り口へと向かった。

外に出ると倉元はタクシーを停めて、乗り込む際に滯に声をかけた。

「また、電話するよ。今日は急ぐから。じゃあ。」

そういつて急いで乗り込んで行き先を告げると、ニツコリと最上級の笑顔を落として滯の前から消えた。滯はしばらくそこに放心状態で立ち尽くしていた。

その夕方から明日の検討会にあわせて資料作成をつめる。今日は深夜になるな。漑は深いため息をつくと一旦休憩に立った。

休憩室に行くと飯田と流星が何か話しをしていた。漑の姿を見てぱっと二人が一瞬構える。漑はどうせ、聞かれない話をしていたんだろうと無視して自販機でコーヒーの味付けを選んでいた。砂糖増量を押したところで流星が話しかけてくる。

「なんだ、ラテン男とえらくゆっくりなランチタイムだったな。」

今日の昼間といい、今といい、言い方に棘がある。いつものからかいモードじゃない。漑はとっさにさっきの倉元のキスを思い出して顔を赤らめながらつい俯いてしまった。なんだか後ろめたい気持ちで流星の目が見れない。こら、堂々としてろ！べつに流星には関係ない！そう言い聞かすが、やはり流星に顔を上げられない。

流星はいつもなら、売り言葉に買い言葉でやり返してくる漑が何も言わず、目もあわせずに様子に何かあったと悟るには十分だった。流星はそう思うと急に腹が立ってきた。

「あの男と何かあったのか？漑。こっちを見ろよ。」

そういつて漑の腕を掴んで引っ張った。

「やめてよ！流星。仕事の邪魔しないで。彼はV誌の看板編集者の倉元圭祐よ。ただでさえ、うちは前回のビハインドがあるのよ。今回V誌のタイアップでもう少しでいい返事がもらえそうなのよ。な

んとしてでもこれを成功させたいの。だから、変に勘ぐって勝手なことしないで！」

漣が流星をキッと睨んで食って掛かる。

「あの男は危険なんだ。おまえなんかすぐ騙されるぞ。必要以上に近づくな。」

流星がイラついてめずらしく声を荒げた。漣はハラハラしながらも負けずにやり返す。

「あなたは私の保護者じゃないでしょう？自分の彼女の心配でもしてたら？」

流星の顔色が変わった。漣はしまったと思ったときにはもう完全に怒らせていた。

「彼女って誰のことだよ！」

漣もあとにひけずについ口を滑らせる。

「しらばっくれて！セクレタリーセクションの美女よ。」

「へえ〜？おまえ、妬いてんの？」

静かににやっと笑って漣に迫ってきた。その冷たい笑顔に漣はぞっとして一瞬、鳥肌が立つ。それでも気持ちを奮い立たせて強気に言い返した。

「何考えてんのよ！あほらしい。私忙しいんだから。流星の相手し

てる暇ないのよ!」

そう投げ捨てるとコーヒーマットをもって流星から逃げるように休憩室を出た。取り残された流星は大きくため息をついた。

「先輩、なんであんなに突っかかるんですか? どうみても子供のけんかみたいです。いつもは冷静でスマートなのに、なんで真藤先輩にだけあんな風になっちゃうんですか? もう…、もどかしくて俺、見てらんないですよ。」

「うるさいな、飯田。」

流星は静かに低い声で言うと、振り向きざまにじろつと飯田を睨みつけた。飯田は悪寒がするように一瞬ゾクツとした。流星は真剣に怒っているのだ。

流星はめったに怒らない。飯田はこれまでバレー部で流星とずっと一緒だったが、どんな状況になっても声を荒げたり、イラついたりはしなかった。いつも冷静沈着で、みんなをうまくなだめたり、励ましたりして上手にマネジメントしていた。言うならば理想的なキャプテンらしいキャプテンだった。その姿に憧れて流星を慕ってこれまでついてきた。

しばらく一緒にいて初めて、時々こんな風に子供みたいに怒るのを目の当たりにするようになったのだ。それはいつも潑に關係するときだけ見られる顔で、他ではまったく見られない光景だった。潑に対してはあんなに子供みたいな接し方をするくせに、いないところでは潑はいかにも自分のものといわんばかりに潑に興味を持つ男を牽制する。飯田は大学時代にそうやって潑の周りに男が近寄らないように自分の女だから勝手に手をつけるなとクギを刺している姿を何度も見かけた。流星のような頭が良くて容姿も抜群の男に俺の女だと強気で出られれば、たいがいの男はかなわないと思って退い

ていった。

なのにこの男はなぜか、滯には何も言わずただ、未だに幼馴染をやっている。

そして自分とは言いばいろんな女をとつかえひっかえ連れて歩いている。ただし、一度として一緒の女を見たことはなかったが…。

飯田は滯に対してのこの不可解な行動だけが、唯一理解できないところだった。好きなら、早く告白してしまえばいいのに…。飯田は大学時代からずっとそう思ってきた。でも、その話に触れると流星の逆鱗に触れるのだ。流星は普段怒らないくせに、怒らせるとかなり迫力がある。恫喝するのではなく、男に対しては限りなく冷たく、静かに怖いのだ。流星のひと睨みは寒気がするぐらい綺麗で凄みが増す。

なのに、飯田はなぜかよくわからない行動をするこの男が妙に好きなのである。それだけに日頃から滯のそばにいて滯の様子を流星に逐一報告してやっているのだ。そうとは知らずに、滯は付き合いやすい仕事のできる後輩と思ってなんでも話してくる。本当は仕事中の滯も家での滯もすべて流星の知るところになっていることを滯はまったくもって気付いていなかった。

飯田は、こんなに執着するなら早く自分のものにすればいいのにと深くため息をついて重い足どりで残業に戻っていった。

6

朝は流星のモーニングコールより、一時間早く起きた。朝食はいらないと母に告げると足早に会社に出かけた。昨日深夜まで残業したが、まだ仕上がってないのだ。だから今日の午後の検討会までに完成させようと早く出社することにしたのだ。いつもなら、早出る時には前日に流星に一言断っておくのだが、昨日のことがあったので、バツが悪くてそのまま無視していた。

とはいえ、流星が怒るのは目に見えていた。

その不安を抱えながらも、流星は関係ないんだからいちいち断らなくてもいいのよ、子供じゃあるまいし。もういい年の大人なんだから。そう思いながらもつい流星のことを考えてしまう。

いつから、こんな風になってしまったんだろう？昔はもっと楽しくいられたのに。大人になるほどに流星が遠くなっていくような気がした。流星は幼い時から、憎まれ口をたたきながらもいつも傍にいて濡をあらゆるものから守ってくれた。

5歳の頃、父が肺炎で入院ことがあった。その時に3日間、濡は流星の家に預けられた。その前もしょっちゅう流星の家に遊びに行っていたが、夜、両親の元から離れて泊まるのは、その時が初めてだった。一度は眠ったものの、夜中に目が覚めて、寝ぼけていたのかまわりの見慣れぬ景色に怖くて不安で泣き出した。その時、流星が濡の声にすぐに気付いて隣の部屋からやってきて、一緒に寝てくれた。その時ずっと手を握っていてくれたのだ。濡は流星が傍にいれば、なぜか安心できて、それからは夜中に起きることはなく、ぐっすり眠れた。

こんなこともあった。小学校の高学年だったと思う。春先、川原で同級生と遊んでいた時、お気に入りの帽子を風で飛ばしてしまい、追いかけてついすっかり足を滑らしそうになったとき流星がかばってくれて、滯は川に落ちずにすんだ。しかし、流星は滯を助けた反動で冷たい川に落ちて、その後3日間熱をだしてしまった。滯はひどく心配したのだが、流星は、気をつけろよ、おまえはなにかに集中すると周りが見えなくなるからなと怒りはしたが、代わりに川に落ちたことを責めることはなかった。

流星はいつもからかうように接してきたり、滯に決して優しいことをいったりすることはなかったが、本当はいつも滯に優しくかった。いつも、滯のために怒ってくれたり、さりげなく助けてくれたりするのだ。流星は普段、滯に憎まれ口をしつかりたたくので、その時滯は、売り言葉に買い言葉で突っぱねてしまうことが多かった。だからいつも滯は流星のやさしさに後から気付かされるのだ。滯はそんな流星を自分には特別な存在だと徐々に思い始め、中学の頃になると流星の存在は幼馴染から滯の中で一番大切な人になって行った。

それから10年以上が経つ。あいかわらず滯に憎まれ口をたたくものの、なんだかんだやさしいのも変わらない。変わったことと言えば、滯以外の女の人を連れて歩くようになったことだ。はじめはショックだった。何日も気がめいった。それでも、流星はそれまでと同じように滯の傍にいたので、何も変わらない現実にいつしか慣れて、気にはなるものの、わずらわなくなった。それでも、目の前で他の女と一緒にいるところを見せられると心が痛かった。

「そうよ、流星とは幼馴染なんだから、特別な感情をもったらだめよ。」

そう独り言で自分に言い聞かせると流星への思いに蓋をして仕事モードに切り替えた。

漣はパワーポイントで美しい資料をサクサク作り上げていく。V誌とのタイアップでクノチアキVS森川クリスで当初より増ページでいけること、V誌のみの企画でクノチアキブランドオリジナルブラシセットの携帯申し込みでの限定販売企画のこと、結城なえの表紙の獲得などをまとめた。よし、完成！といきまいたところで、この企画だけでは、店頭販売を支援する施策が手薄なことに漣は気付いた。

前は発売日を前倒しにされたことだけが敗因ではなかった。目立つ敗因ではあったが、本当のところは店頭販売を支援する斬新な仕掛けが不足していたため、結局現場の販売力のおかげでなんとか3位をキープできたのである。

このまま行くとまた、今回も現場の販売力だけに頼らねばならなくなる。漣はほとほと自分の甘さに嫌気がさした。しかし、そんな泣き言は言ってられない。でも、時間がない。どうするか？

店売を伸ばすために何ができるのか…。

漣は商品開発部で先日試作品を見せてもらった時のことを思い出していた。本当に、ステキに仕上がっていて、パッケージデザインから新アイテム、色揃えなど今まで以上に自信がもてるものばかりだった。それだけにうまく企画をのせることで大ヒットにつながるはずだ、これで万年3位を抜け出せるかも…と、漣は胸が高鳴ったのだった。漣はしばらくその時のことを回想していた。そして、急にはっとして時計を見て、慌てて受話器をとった。

「おはようございます。上野さんはもういらしてますか？」

上野がちょうど姿を見せたらしく電話を取り次いでもらえた。漣は商品開発担当者の上野に相談を持ちかけた。

「アイシャドウと口紅のケースを特別仕様として追加できないでしょうか。」

漣は、人気ブランドとのコラボでケースを作り、それを予約者のみ購入できるサービスを提案した。しかも、価格設定を同じ中身の定番となる予定のものより、高く設定すると言う内容だ。毎回予約特典にはオリジナルの化粧小物などをプレゼントしていたが、今では定番のようにどこもが実施していて、最近では当たり前になってきている。高感度の消費者は、はなからプレゼント品に期待を持ってない。ついていけばラッキーぐらいで、ありがたみはさほど感じていない。それではたいして店売のバックアップにならなかった。それよりも、商品そのものが欲しいという気にさせることが大切だ。

漣が考えたのは、高感度層は多少デザイン料など上乗せしても、魅力のあるものなら喰らいついてくるはず、ということだった。販売個数を伸ばすには、商品そのものを手に入れたいと思わせることが大切である。もちろん、中身にも自信があるので両方の相乗効果で予約だけでヒットに持ち込めるはずだと踏んでいるのだ。しかも、予約数しか作らないので、お客様にとってはプレミアム商品になる上、こちらも在庫をすべてはけるといふメリットもある。そして、もともと準備している商品は見た目のデザインもとてもいいので、その後、定番として店頭にならんでもさらに発売後の盛り上がりをも十分期待できると漣は読んでいた。

はじめは上野は渋ったが、候補として考えているブランドを列挙すると、その契約が取れたらなんとかすると約束してくれた。

電話を切ると、早速そのブランドの選定に入った。いくつか検討したが、結局デザインは、海外も含め、今大人気になっている、クリスタルのブランドシンシア社とのコラボで交渉してみることにした。シンシアはどの雑誌にも毎月取り上げられている上、デパートからの積極的な誘いで次々とショップがオープンし、どこも盛況で話題になっていた。漣も好きでよく身につけている。

とにかくこの企画は今日の午後には仮提案として持っていくしかないが、OKをもらえればなにがなんでも絶対に契約を取ろうと漣は心に決めた。漣がその内容をさっとまとめたところで、そろそろ本来の始業時間が近づいてきた。

8割方プレゼン資料を作成し終わると、漣はやっと切羽詰った緊張感から解放された気分になった。やはり、仕事をするなら疲れがたまっている夜よりも朝の方が頭の回転がいい。そう思いつつサンドイツチをかじりながら調子よくキーボードを打っていると、飯田がやってきた。

「おはようございます。やっぱり、来てましたね。流星先輩から電話がありましたよ。今日は早出っていう話だったのかって。不気味なぐらいぐらい怒ってましたよ。あとでなんとかしてくださいね。俺は関係ありませんからね。先輩。」

すっかり仕事にどっぷり浸かって恍惚としていたところを飯田に邪魔されて、超不機嫌な顔で飯田を睨みつけた。

「ちょっと！せっかくいいところだったのに、流星の話なんてもちださないでよ。ひらめきがどっかにいっちゃうじゃない。流星なんか勝手に怒らせとけばいいのよ。あんな我がままな女たらしなんかに文句言われる筋合いはないわ！」

飯田はしまったと思った。どうやら地雷をふんだらしい。やっぱり、昨日から怒っているのだ。漣は怒っている時はひたすら仕事に逃げ込むタイプだった。この二人はほんとどこまでいっても意地っ張りで一向に進展しない。

この先にこの二人にハッピーエンドはあるのだろうか…。

飯田は漣も流星のことを意識しているのはわかっているだけでもどかしく思ってた、深くため息をついた。

午後の検討会では、漣がまとめた新製品のMK計画は絶賛され、そのためのバックアップはいとわないと幹部からのお墨付きをもらった。逆境にたたされると漣は驚くほど勇敢に仕事をする。飯田はその姿に流星とは違う尊敬の念を抱いていた。

この人も才能豊かなひとだからな、流星先輩もたいへんな人に惚れてますね、とふと流星を思いやった。飯田がそんなことを考えてぼんやりしていると、急に漣が話しかけてきた。

「飯田君、クノチアキの件、うまくまとめてくれたわ。あれがうちの切り札だから確約してなかったらかつこつかないところだった。ほんと、あなたは頼りになるわ。ありがとう。」

嬉しそうに顔を蒸気させている。飯田は漣のめったにみせない無邪気な嬉しそうな顔を見て一瞬ドキッとした。

漣は飯田にとっても魅力的な女だった。近くにいると時々その魅力にいかれそうになる。そのたびに流星の恐ろしい睨みを思い出して、セーブするのだが…。流星先輩、早くなんとかしてくださいね。

そうじゃないと俺のほうが我慢できなくなるんだから。漑の隣でキーボードを打ちながらまた、小さくため息をついた。

夕方めずらしく定時で帰ろうと会社を出たところで、漑は流星に呼び止められた。流星は怒っている。声を荒げたりはしないがむっとして怒っているオーラが立ち込めていた。漑はため息をつく。

「なに？今日はもう疲れたから帰ろうと思ってるの。用事があるなら、早くして。」

それは流星の神経を逆撫でしたようだった。綺麗な顔のこめかみが一瞬ピクツと動いたのだ。漑は嫌な予感がした。

「じゃあ、帰ろう。」

そう一言言って漑の腕を掴んで歩き出した。

「ちょっと離してよ。誤解されるじゃない！」

漑は流星の手を振り払おうとして流星と視線が絡み合った。流星は悲しそうな瞳を漑に向けてきた。漑ははっとして思わず固まってしまった。二人はしばらく睨みあっていたが、ずっと流星が話を話して歩き出す。それから家に着くまで結局、一言も話をしなかった。そんなことは初めてだった。

最近、流星がおかしい…。

あなたはいったい何を考えてるの？

漑は流星の背中をじっと見ながら不安で押しつぶされそうだった。

次の朝、滯は部屋の内線電話で母親に起こされて驚いた。朝食のとき流星は？と聞くとしばらく忙しいから早出だから食事はいらな
いっていったわとあっさり言われた。

なんだ、忙しいんだ、そう思ったが、いつも電話してくる声がないのはひどく寂しかった。早出のときでも、今まで電話はくれていたのに：と、ふと昨日の悲しそうな目を思い出して胸が痛くなった。なんだか今朝は胸焼けしてほとんど朝食を食べられない。母が調子でも悪いの？と心配そうに聞いてきたが、胃の調子がよくないだけ
と言いつつ早々に家を出た。

その日はあまり仕事にならなかった。流星の姿がどこにもみあたらないのだ。いつもは意識して避けているのだが、今日はどうしても目で追ってしまう。一日会議にでもはいつているのだろうか。何
度もため息をつく姿に飯田がたまりかねて声をかける。

「どうしたんですか、今日は何度もため息をついちゃって。流星先輩となにかあったんですか？」

痛いところをつかれて滯は黙り込んでしまった。凶星だったのか、まずいことを言ってしまったなと飯田はしきりに反省した。

しかし、同時に二人して落ち込んでる様子に首をかしげた。

今朝、出社したらもう既に流星が来ていて珍しいですねと声をかけると、黙ってじろつと睨み返された。飯田は朝から流星の機嫌が

悪いのがわかってやばいと思ってかまうのをやめたのだ。

そう言えば、今朝は別々に来てたし、いつもなら流星は必ずこっちのエリアを時々観察するために視線をとぼしてくるのに、今日はずっと姿をみせない。おそらくあのあと別室にこもったのだろう。飯田はやれやれとまた、大きくため息をついた。

あれから一週間がたった。あれ以来ずっと流星の姿を見ていない。こんなことははじめだった。流星は滯が望もうが望まなろうがいつも目の届くところにいた。滯はそんな状況にずっと当たり前のように思っていたので、一週間まるつきり姿を見ないのは互いが旅行にいつているときぐらいしかなかった。それでも旅行だという名目があるから、特に気にせずにいられたが、今回は違った。

何も理由がないのだ。

一週間前、流星の様子がおかしかったということ以外に…。

今日は週末で新入社員が研修を終えて今日から出社してきていた。今日は新人の歓迎会だ。その時ばかりは流星の顔がみられるだろう、滯はそう高を括っていた。実際は、新しい企画のプロジェクトメンバーになって、月曜の朝までに仕上げなくてはいけない仕事で一杯でとても歓迎会に行けるような状況ではなかったのだ。

流星がそんなことになっているとはまったく知らない滯は、流星の顔を見れるだろうという希望に少しでも明るく仕事ができた。あとで顔を見たらなんで顔を見せなかったのか、問い詰めてやる…。

新人の歓迎会とは言え、業界に名のおった化粧品メーカーである滯たちの会社は、ベイエリアの一等地にあるグラントオーシャンホテルを会場に押さえていた。いくつか事業があるが全員が出席のため、総勢1000人が集うこととなった。

そのうち、約200人が新入社員だ。

今年は大盤振る舞いで採用しているが、実は昨年度の採用はゼロだったのだ。

ここ数年、人数が減っていなかったので採用を控えていたのだ。しかし、今年、200人も大盤振る舞いした背景には2007年問題があった。団塊の世代が一気に定年を迎えて、今年からは退職者が山のようにでる。すでに役職定年で早期退職も出てきているため、背に腹を替えられず、大量採用に踏み切った。

「真藤先輩、やっぱりいいですねえ、新人がいるって。なんか新鮮な風が吹いてきますよ。」

飯田が目躍らせて若い女性新入社員に熱い視線を送っている。

「なにばかなこといってるの。あなたも若いじゃない、そんな年寄りのようなこと言ってる。」

そう言って面白がって笑う。

「ああ、あの中から流星や飯田君に餌食になるかわいそうな子がいるかと思うと気の毒でならないわ。」

飯田が飲んでいたビールを一瞬喉に詰まらせた。

「ごほっ！…せ、先輩！それひどっ！流星先輩はわかりますけど、俺なんて紳士ですよ！誠実ですし…。流星先輩と一緒にしないでくださいよ！」

「それじゃなに、流星はけだものでいたいげな若い女の子を手籠めにしているとでも？」

やばい……。漣はお酒がはいると、大胆できつくなるのだ。流星に俺が行けないからしっかり見張ってるように念を押されてきたのだった。いらぬことでつい口を滑らせてしまったことを飯田は多大に反省した。

しかし、もうおそかった、漣が荒れはじめた。

「やっぱりそうよね。流星はけだものよ！ほんと女たらしだし！あいつ何人女をとつかえれば気がすむのよ！しかもにくったらしいことに、面食いだからかわいくて綺麗な子ばかり！絶対男ができない私へのあてつけなのよ！絶対あんな男信用できない！そうでしょ？飯田君。君もあんな男とつるんできつまでたつても彼女できないわよ。それどころかかわいい子でもつれてってみなさいよ。流星に持ってかれるかもよ。うん、友達考えたほうがいいわよ！」

「うわあ、荒れてますね、先輩。もうあんまり飲まないほうがいいですよ。」

飯田がオロオロしてなだめにかかる。

「うるさいわね、別に酔ってなんかいいわよ。」

そう言って漣はギロツと飯田を睨みつける。

確かに酔ってはいないけど、荒れてるよな……。どう考えても……。なんでこの二人ってこんなに似てるんだろう。だいたい二人とも素直じゃない上にハードなんだよな、性格が。俺、踏んだりけったりじゃ

んか。飯田はそう思いながら、また深くため息をついた。

ちえ、真藤先輩のおもりをしなくてもいいなら、あの新人君たちの輪には入れたのに、流星先輩うらみまずよ！もちろん、真藤先輩をくどいていいんなら役得ではありますけどね、俺まだ死にたくないし…。

その瞬間、小会議室で大量の資料に囲まれて1人PCに向かっていた流星がくしゃみをした。

「ちえ、誰だよ、人のことわさしてんのは！どうせろくな噂じゃないんだろうけどな！」

さつきからキーボードをうつ手がとまっているのだ。一向に考えが浮かばない流星はひどくイラついていた。イラつきの原因は仕事じゃなかった。滯の顔をもう一週間も見ていないからだ。しばらく会わずにしよう、電話すらしないと決めたのは自分なのに、ひどくめいている。

この間、滯が自分から離れたがっているような感じがして、自分がいては滯のためにならないとふと思ってしまったのだ。いつまでも自分が滯にかまっていると滯も年頃なのに恋愛もできない。そんなことからわかっていたが、なんだかあの時、滯の様子が変わったので、妙に真剣にそんなことを考えてしまった。

いくら滯のことが好きでも、滯が自分のことをただの幼馴染と思ってる限り、仕方がない。そろそろ離れないといけないのか…。

流星は自分の狡さに気付いていた。

今まで滯から離れたくないばかりに幼馴染の立場を維持するべく、滯を好きな気持ちをごまかしてきた。そのカムフラージュとしていろんな女と付き合った。しかしどれも、長く続いて一ヶ月だった。適当に付き合って、適当に別れた。

流星は女にとってはひどい男だった。はじめから自分とは本気にならないと宣言して、それでもいいといって本気にならない前提で付き合ってきたのだ。

とはいえ、そんな約束はできるはずもなく、相手が本気になりそうな気配があると頃あい見て別れてきたのだ。スマートフォンにできるだけ相手を傷つけないように…。

しかし、最近は適当に女と付き合うことさえ出来ずにいた。この間現れたラテン男、倉元の存在が、動物的勘がはたらいて危険人物と認識したのだ。それからどうにも滯のことが気になって気が気じゃなくなってしまったのだ。

いつもは予防線を張っておけば、滯から出向いていけない限りは男の影はないので安心できた

が、あの男は別格だった。おまけに滯が真剣に打ち込んでいる仕事のターゲットと来たら、危険なんてもう極まりない。おそらくランチに行ったときに何かあったのは明白だが、滯に怒鳴られてしまったからは嫌われるのが怖くて聞けずにいる。

俺は何をしてるんだろう？流星はPCの画面をじっと眺めて思わず考え込む。

流星は今まで、滯しかみていない。高校行く時だって、大学行くときだって、この会社に入る時だってそう。理由なんてひとつだっ

た。漚がいるから。

流星はなんでも器用にこなす上、頭もいい。だからそれなりになんでも人よりうまくやれてしまうがために、時に人からは尊敬されたりもする。

しかし、流星にはそんなことどうでもよかった。実際は漚以外に興味ももてるものがないのだ。そんな自分はおかしいと思いつつも、どうしても他に興味が持てない。流星が漚以外のことには冷静でひどく客観的なのは、漚以外に興味を持てないからなのだ。だから、漚に嫌われたら、すべてが終わってしまうように感じて怖いのだ。唯一の物をなくしてしまう自分が怖くてしかたない。

だから、流星は自分を誤魔化し、漚の前で女たらしの幼馴染を演じている。

それでも、もう、流星も漚も28歳という微妙な年頃になってきて、漚は特に結婚も意識してもおかしくない。いつまでも子供じゃないのだ。手に入れるか、手放すかのどちらかにしなければならぬと、きききているのだ。

漚に本当のことを言うのか…。

でも、それで、ただの幼馴染としか思ってたかったら、あの漚の潔癖な性格からして、もう、

流星に会わないように努力するだろう。自分が応えてやれないとすれば、そうする優しさが漚にはある。

でも、本当にそれで自分が耐えられるのか…。漚しかない自分は、漚がいない生活に本当に耐えられるのか。そう思うと自分のやり切

れない思いをもてあまして、仕事にも身がはいらない。

「はっ！俺はどうしようもなくバカな男だな……。自分が傷つくのが怖いなんて……。」

そう言って自分をあざけりながら、流星はP Cの前で頭を抱えた。

会場がにぎやかく盛り上がってきた。随分架橋に入っている。そろそろ中締めというころ、飯田は漣がトイレに行ったままなかなか戻ってないことに気付いて、探しに行った。

漣が化粧直しを済ませて会場に戻ろうとエレベーターホールの傍を横切ろうとした時、後ろから漣を呼ぶ声に気づいた。聞き覚えのある声にふと足を止めた。

「真藤さん、偶然ですね。こんなところで。」

漣が振り返るとそこには倉元が立っていた。

倉元はパーティーのためか、ドレスアップされて、いつもより一層上品で華やかな雰囲気をかもし出していた。

少し飲んでいるのだろう、男の色気がいつもに増してあでやかに強烈に漂っていた。一瞬倉元の色気にぐらっとしそうになったのを漣はぐっと堪えつつ、仕事モードの顔してにっこり挨拶した。

「こんばんは。倉元さん。本当、偶然ですね。今日はどちらのパーティーにご出席ですか？」

「ああ、以前、モデルの仕事で関係があったアパレルメーカーの記念パーティーでね、会長さんが呼んでくださったんだ。もう引退したのね、ありがたいことだよ。」

倉元は嬉しそうに笑う。漣はその笑顔にドキツとした。いい顔だなと漠然と思った。倉元もいつもより感情表現が豊かな漣に目が輝い

ている。

「少し酔ってるの？」

「いいえ、少し飲みましたけど、酔ってはいませんよ。」

漣はこの間のランチの時より、今日は少し飲んでるせいかな、あまり緊張せずに倉元と話せるのでなんだか嬉しかった。

「もうそろそろそちらも終わり？」

「ええ、たぶん、そろそろ中締めです。」

「このあと予定は？」

「いえ、別に、これで帰ります。」

漣は少し遠慮がちに微笑んだ。

「そう、じゃ、ちょうどよかった。僕につきあってくれないかな。こんなときに仕事の話もなんだけど、あれからちょっと考えたことがあってね、是非君と会って話をしたいと思ってたんだ。こんな時間じゃだめかい？」

漣は倉元の口ぶりから、いい話に違いないと思い目を輝かせた。

「いえ、そんな…。お仕事の話なら喜んで一緒にします。じつは私もあれから計画で練り直したことがいくつかあって、そろそろ倉元さんにお話しないと思ってたんですよ。」

漚が顔を上気させて無邪気に倉元に返した。倉元はいつもと雰囲気の違い漚に目を細めながら満足気に微笑んだ。

「そう？よかった。じゃ、15分後にホテルのロビーで待ってるよ。」

「はい。」

漚は去っていく倉元の後姿に丁寧に辞儀をした。そして会場に戻ろうと振り返ったとき、少しはなれたところに飯田が立っていた。

「先輩、今のV誌の倉元さんでしょ？何話してたんですか？」

「え？ああ、この間のタイアップ企画の話よ。この後、少し話をしてくるわ。どうやら新しいアイディアがうかんだみたいなの。」

「えっ？あのラテン野…おっと、倉元さんと出かけるんですか？やめといたほうがいいですよ。なんかあいつうさんくさい。仕事の話なら昼間アポとればいいんです。」

「何、流星みたいなことってんのよ、飯田君。チャンスはつかまないとなくした後では悔やんでも悔やまれないわ。あ、ほら、うちの中締めよ。いきましょ！」

そう言って飯田を促してもとの会場へと戻っていった。

飯田はまずい展開に1人焦ってハラハラしながら、中締めの挨拶と三本締めを上空でやり過ごした。終わった後、飯田が止めるのも無視して漚は待ち合わせの場所へと向かっていった。

ロビーにつくと倉元がすでに、ゆったりとした白いレザアのソファに腰掛けて待っていた。さすがに元モデルである。長い足を組んでリラックスして座ってるサマはグラビア写真をみているかのようで、驚くほど決まっている。近くを通る女性がちらっと必ず倉元を見に行く。

「お待たせしました。倉元さん。」

滯は倉元の傍に近づくと丁寧にお辞儀した。倉元はクスクス笑う。

「ねえ、その他人行儀やめようよ。普通にして、普通に。」

「え？普通にですか。普通にしてるつもりなんですけど、変ですか？」

「少なくとも君は春日とかいう彼にお辞儀はしないだろ？」

滯は急に流星のことをもちだされて戸惑った

「そんな怖い顔しなくても…。ごめんごめん、今日はちょっと口が過ぎるな。アルコールが入るとすぐこれだから。許してね。この間の彼にちよつと妬けてるもんだから。つい…。」

「はっ？倉元さん？」

滯がおどろいた顔をして倉元の顔を見返した。倉元は笑いながら立ち上がって滯の傍にたって腕さりげなく差し出した。

「さあ、参りましょう。滯さん。」

急に名前を呼ばれて一瞬真っ赤になって俯いた。

「漣さん、手を。」

倉元に促されるままに差し出された腕に軽く手をかけると倉元は色気たっぷりの笑顔を漣に向けて歩き出した。

倉元が連れて行ってくれたのはこのバイエリアのホテルで一番景観がいいといわれるプレシヤスアーバンホテルのラウンジだった。ラウンジにはいるとすべてが目の前に広がる夜景と一体化していた。歩いていくと足下に薄っすら明かりがちらほら照らされ、歩いている足元を見れば、そこがラウンジであることやと認識できるくらい迫力の景観だった。まわりを眺めると遠くにぽつんぽつんと人がいるぐらいで静かにゆったりとしたジャズの調べだけが響いていた。

「ステキ！」

漣がおどろいて景色にあっけにとられている。さりげなく倉元が傍によって漣の腰に手を回してソファを勧めた。

「ここへどうぞ。」

一瞬、漣ははっとしたが、促されるままに座った。

「ステキだろう？ 君を是非連れて来たかったんだ。喜ぶ顔が見たくてね。」

「えっ？ お仕事のお話じゃないんですか？」

「もちろん仕事もだよ。でも、仕事ばかりじゃ寂しいじゃない？
こんなムードもいいでしょ？」

倉元は確信犯のようにニツコリ笑っているのだが、滯の側からだと思
くてその様子が見えにくい。滯の顔にはちょうど月明かりが当たっ
て、白い肌がさらに青く透き通って、艶かしく美しくなめらかな曲
線をくつきり映し出していた。倉元はうっとりとして滯を見つめた。ほ
んとうに綺麗な娘だ。こんな上等な子は見たことがない。

モデルの時も今も、女といえれば自分を売り込むか倉元にいい寄る
かのどちらかで、下心がみえみえで顔形は綺麗でも、心が綺麗と思
える女は見たことがなかった。

でも、滯は違った。はじめから、下心がまったくない。しかも、禁
欲的でいて、どこかその清潔で上品なところがひどく色気を感じさ
せるのだ。これは、持って生まれたうちから光るものなのだろう。
倉元は初めてあった時、滯のそんな清麗さに一目ぼれしたのだ。

こんな職業をやっていると女を見慣れてしまうのでそんなことは
ありえないと思っていたのだが、滯に出逢って、すっかり返上して
しまった。その時から、忘れられない人となった。もしかしたらは
じめて心から惹かれた人なのかもしれない。倉元は景色に見とれて
いる滯を眺めながらぼんやり思った。

ふと景色に夢中だった滯が振り返った。一瞬倉元がどきつとする。

「さっきの考えたことってなんですか？」

滯はにこやかに微笑んで倉元に問いかけた。倉元が平静を装って微

笑みながら応える。

「そう言えば、プレス発表、今回はどこでやるんだい？」

「え？ ああ、えー、ま、倉元さんだからいっか。V誌にはなるべくいいところを欲しいから…。」

滯は照れくさそうに勿体つけた。

「レジントンですよ。」

「へえ、レジントン？ よく取れたね。あそこは著名人が使うので有名だから、なかなか押さえるの大変なんだよ。」

倉元が驚いた表情で言った。

「うちには優秀なスタッフがおりますもん♪あそこのガーデンテラスを貸切です。」

滯は嬉しそうに得意げな顔で倉元を見る。

「ほう、すごいなあ。それ、是非、うちで独占取材させてくれないかな。さっき考えたことってそれなんだ。クノチアキと結城ななえだろ？ 君達スタッフに密着させてもらって裏方も含めて取材した様子を掲載したいと思ったんだ。どうかな？」

「えっ？ それ、本当ですか？ もう、是非お願いしたいです！」

滯は子供みたいにはしゃいだ様子で満面の笑顔を倉元に向けてくる。倉元はどうしようもなく愛おしさがこみ上げてきて、抱きしめたく

なる衝動ををぐつと堪えた。

「真藤さんの報告はなんだい？」

漣はぽつと顔を赤らめて少し恥ずかしそうに口を開いた。

「前回また3位でおわって…悔しくて…。そのリベンジで今回は気合いれて企画を考えたはずだったんです。でも…、私バカだから、前回なんで3位に終わったかまったくぴんときてなかったんですよ。それで、今回は以前にお話したときより、内容を増やしました。これで絶対いけるはずなんです！」

漣は真顔でまっすぐ倉元を見据えてくる。倉元はその視線に釘付けになった。漣は本当に仕事で真剣になるといい顔をする。

「まだ、現在交渉中なので詳しくはお話できませんが、人気ブランドとのコラボでデザインケース入りの商品を予約のみの限定で企画しているんです。先日の初回の交渉も好感触なので、時期になったら詳しくお話できます。私も大好きなブランドですし、とっても楽しみなんで、絶対のこの話は取りたいですね。」

漣は目をキラキラさせて子供のような表情をするともう一度外の夜景に目をやる。

結局、漣は目の前の迫力の景色に魅入られてつい、2杯もカクテルを飲んでしまった。少し体が火照っている。ちょっと飲みすぎたかもしれない。はじめに、新人の歓迎パーティーで流星の悪口を飯田にぶつけながら結構飲んでいたのだ。

漣はソファに体をあずけると大きく深呼吸した。

「ん？どうしたの？少し酔った？」

「ええ、でも大丈夫です。」

漣は少し苦笑いして返す。

「じゃ、帰ろうか？」

倉元は優しく囁くように行ってニツコリ微笑んだ。漣もそれに同意した。倉元はウェイターを呼ぶと席で支払いをすませて、漣を大事そうに支えて立ち上がった。

「すみません、大丈夫ですから。私普通に歩けますし。」

漣が、倉元がぴったりとよりそいながら優しく支えてくれるのを丁寧に断ろうとするが、倉元はにっこり笑うだけではぐらかすようにやり過ごした。しかたがないのでそのままされるがままにラウンジを出て、プレシヤスアーバンホテルもあとにした。

「少し、このベイエリアを歩こうか。酔い覚ましに。」

倉元がそう提案すると、漣は夜の海の風がひんやりとして心地よかったので酔い覚ましならと頷いた。

夜の海は美しかった。水面にその上にかかる道路を走る車の光が走馬灯のように駆け抜ける。火照った肌はひんやりとした海風にさらされ、さわやかな気分になんてくれた。

「倉元さんはどうしてモデルをやめたんですか？」

漣は唐突に倉元に声をかけた。質問の内容に倉元は少々驚いたが、もう一度につこりと笑った。

「モデルよりも自分で何かをやりたかったからかな。雑誌の仕事はモデル時代から興味があつたんだ。今はまだ、一編集者だけど、近い将来は自分が編集長になって本当に自分がプロデュースした雑誌を作りたいと思っているんだ。それから、今立ち上げかけている僕のブランドもね、もっと大きくしていきたいんだ。」

倉元は少年のようにキラキラした目で照れくさそうに話した。

「へえ、ステキですね。倉元さん今、とってもステキな人に見えました。」

「え？ ひどいなあ。今まではなんなの？」

くすくす笑いながら漣の顔を覗きこむ。漣は照れながら、ちらっと倉元を見て話を続ける。

「倉元さんはいつもかっこよくてセクシーで。目のやり場に困るくらいステキですよ。：でも、さっきの：夢を照れくさそうに語ってる倉元さんはもっとステキです。少年みたいでなんか、いいですね。」

倉元はドキッと心臓が跳ね上がるのを感じて驚いた。こんなに心が動く瞬間なんていままでなかった。漣はいつも簡単に倉元の心をを翻弄する。倉元はもう、漣の純粹さにとことんやられて参っていた。

「漣さん…、漣…。あなたが好きです。」

突然の倉元の告白に漣は驚いて振り返ろうとした瞬間抱き寄せられた。とっさに振りほどこうとするが、倉元の逞しい腕に強く抱きしめられて身動きがとれなかった。そして倉元が自分の胸に顔をうずめている漣の顔を覗きこむように顔を近づけてくると、漣の額や頬に軽く唇でやさしく触れていく。そして愛おしげに唇を軽く食むようにやさしく重ねてきた。

漣はなんとか倉元から離れようとするが、倉元のエゴイストの香に包まれて、突然のキスに翻弄されて力がいらない。体は思いのほか、倉元にもたれかかり、気が遠くなっていた。

心の中でなんとかしなくてはと思うのだが、頭はぼうっとして、一瞬ふっと意識が落ちそうになる。飲みすぎたのか、急にアルコールがまわってきたようで、身体に力はいらず思うようにならない。それでも漣は、はっと我にかえって、もう一度、倉元の腕からすり抜けようと力を入れようとした。その瞬間、急に体が軽くなった。

「倉元さん、ちょっと冗談がすぎませんか。」

聞き覚えのある声と同時に、倉元が押しのけられ、漣の目に流星の姿が飛び込んできた。

「りゅう…せ…い？」

漣は思わず、ふらついて倒れそうになった。流星がすかさず、腕を掴むと漣を自分の方に抱き寄せた。その時に見た流星の顔は今まで見たことがないくらいに綺麗で精悍な顔が険しく恐ろしいほどに凄みを増していた。

倉元は流星に押しのけられてよろけかけた体制を立て直すと、流星をじろつと睨んで挑むように微笑んだ。

「冗談のつもりはないが…。君には関係ないだろう？腐れ縁の春日君。」

不敵に倉元は笑う。

「ところが関係あるんでね。漣は俺のものだから。勝手に人のものに手をつけないで欲しいな。倉元さん。」

流星が静かに冷たく笑って返した。

「えっ？」

漣は流星の言葉に耳を疑った。

「ほお、でも、彼女はそう思っていないみただけど？」

二人はじつと互いに鋭い目つきでにらみ合っている。しばらくは何も言わずに沈黙していた。二人の間に緊迫してピリピリした空気が流れはじめ、一発触発の感じを察知した漣はとっさに声を上げた。

「すみません！倉元さん！ごめんなさい。」

突然、漣が強引に流星の腕をすり抜け流星と倉元の間に割って入った。

「あなたはステキな人だし、本当に懂れます。でも、ごめんなさい。私好きな人がいるんです。私のはっきり言わないから……。本当にごめんなさい。私はあなたとはいい仕事したいと本当、そう思っている……。ごめんなさい。」

漣は腰まで深々と頭を下げると、倉元の顔を見ずに流星の腕を引っ張って走りだした。しばらく走って海の傍まで来ると、流星が強引に腕を引き、漣を引っ張って引き止めた。

「ちょっとまってよ！漣！誰だよ、好きなやつって！」

流星がむっとしてかなり機嫌悪そうに突っかかってきた。漣はア

ルコールの所為か、走ったことで心臓が煽られて息が上がっている。胸をさすりながら少し中腰になってつらそうに息をしていた。それでも呼吸をすばやく整えると、漑は負けじといつものように突っぱねた。

「そんなの：誰でもいいじゃない！」

そう言って流星に振り返った。

「それより、いつから私はあなたのものになったわけ？人前で適当なことを言わないでよ！」

「適当なんかじゃない！」

流星が真顔で漑をじっと見つめる。漑は瞬間、息を飲み込んだ。そして：沈黙が続く。何か言わないとけないのに言葉が出てこないのがひどくもどかしい。漑の鼓動は痛いぐらいに胸を打ちつけ、その音が体中に響き渡る。体の中の熱い血がざわざわとどよめくように全身を駆け巡った。

「俺は：おまえのことがずっと好きだったんだ！」

流星が堰を切ったように声を荒げた。その瞬間、その吐き出された言葉に息が止まりそうになる。

「えっ？うそ…。いつもそうやって私をからかうんだから…。いい加減にしてよね！」

「嘘なんかじゃない！」

流星は滯をぐいっと強く抱き寄せて唇を強く押し付け、激しく性急に舌を絡ませてきた。滯は驚いて目を剥いた。そして瞬間、流星の胸にあった手に力をこめて少しだけ抗おうとしたが、流星の懐かしい香に包まれると諦めたように力が抜けていき、滯は次第に目を閉じて流星にされるがままに身を任せた。

流星はその様子に気付くと、一瞬唇を離してもう一度今度は優しく大事そうに唇を重ねる。そして滯の細い腰を優しく抱き寄せ、ゆっくりと唇を離して滯を愛しむような目でじっと見つめた。滯も流星の目をじっと思いつめたように見つめ返してくる。

「俺はおまえが好きで好きで、おまえしか俺の興味の持てるものなんてないんだ。俺はすべてがおまえ中心に回ってるぐらいおまえにイカれてるんだ。おまえが他の男に抱かれるなんて考えられない。そんな男は殺してやる!」

流星が真顔で怒ったように言う。

「流…せい…?」

「俺がどんな思いでおまえの傍にいたと思ってるんだ!俺は28年間、おまえしか見てない!」

流星が苦しそうに心のうちを吐き出す。

「うそ…。だって、流星はいつも綺麗な人と一緒にいたじゃない!」

「あんなのカモフラージュだ。おまえと離れたくなかった…。ずっと仲のいい幼馴染としてでもおまえの傍にいたかったんだ。こんなにおまえにイカれてることがわかれば、おまえが遠ざかっていくか

もしれないって…。そう思うと怖くていえなかった…。だから、それなら、幼馴染でずっと傍にいるほうがいいと思ったんだ。でも：ダメだ。やっぱり…。あんなやつに持っていかれるくらいなら、俺は死ぬほうがいい。」

「流星？」

「俺はおまえが好きだ。28年間おまえばかり見てきた。これから先もおまえしかない。こんな俺は嫌か？ 漣？」

漣は潤んだ目でじっと流星の顔を見上げると、流星の背中に手を回して自分から体を持たれかけてしっかりと抱きしめた。そして流星の胸に頬を摺り寄せると、肩で大きく息を吸った。

「漣？」

「…私、ずっとあなたが好きだった。でも、あなたにとって私なんてただの幼馴染でまったく女として見られてないと思ってた。あなたの周りにはいつも綺麗な人がいて…。わたしなんかと違って明るくて話が上手でかわいくて…。私はいつも悔しかった…。流星の隣は私の場所のはずなのに…。って。だから好きになっちゃだめって…。私、あなたが急に抱きしめてきたり、キスしようとするのも、からかってるんだとばかり思ってた。それでも、そんな風にあなたが傍にくるだけでどっか期待してる自分がいて…。そのたびに私は、ただの幼馴染なんだからっていつも自分をセーブすることで精一杯だった。」

漣は流星の胸に顔をうずめたまま、搾り出すように低い声で言った。身体は小刻みに震えている。流星は少し戸惑いながらも自分の腕の中で小さく震える背中を優しくそっと擦ってやった。その瞬間、漣

は堪えていた涙が溢れだした。

「流星のばっかっ！なんでもっと早く言ってくれないのよ！私はあなたしか：あなたしか見てなかったのに！私だってどんな気持ちであなたの傍にいたと思ってるのよ！」

漣は泣きながら顔を伏せたまま流星を必死に叩く。流星はその手を掴んで受け止めるともう片方の手で漣の頬を伝う涙をぬぐってやった。

「漣…、わかった…、ごめん…。漣…、もう泣くな。」

流星は自分の額を漣の額にくっつけて優しくなだめるように声をかける。そして今度は愛しむように軽く唇を甘噛みして大事そうに唇を重ねた。それはやがてお互いを確かめ合うように深く甘い口づけに変わっていった。漣は流星の甘い香に包まれて、流星の体から響く心臓の音や少し熱っぽいぐらいのぬくもりを感じているうちに、いつの間にか心がおだやかに満たされてく。漣はずっとここに帰ってきたかったのだ。流星の傍に…。

しばらくして流星が耳の傍で囁いた。

「帰ろう。漣。」

漣は黙って頷いた。

帰りのタクシーの中で、二人は何も話はしなかったが、流星はずっと漣の手をしっかりと握っていた。つながれた手から流星の熱っぽさが伝わってきて、漣はどうしようもなく、ときどきして体が火照って落ち着かなかった。お酒の所為じゃない。流星の所為だ。体

の中心から湧き上がる熱に滯はぼうつとしていた。

二人は家の傍でタクシーを降りて歩いた。滯はなんだか今日は流星と離れたくなかった。それでも、家の前まで来ると、

「ありがとう…。おやすみ…。」

そう言って名残惜しそうに流星の手を離そうとした。その時、流星が強引に滯を引き寄せて抱きしめた。

「やっぱりダメだ。今日は離したくない。」

流星の体が熱を帯びて鼓動が早くなるのが伝わってくる。

「流星…。」

「滯…。もう誰にも渡さない…。」

二人はその夜、それまでの想いを埋めるかのように何度も何度も抱き合った。

朝方、まどろむ意識の中、やや明るくなってきた部屋の中をぼんやり眺めた。そういえばもう10年以上流星の部屋をおとずれていなかった。さすがに子供の頃とは様子は違っている。それでもどこかなつかしさを感じる流星の空気感はかわっていなかった。

ふと、滯は流星のベッドの脇のテーブルに目をやって驚いた。自分の高校卒業の時の写真が飾られていたのだ。

「これ…。卒業式のときの…。いつの間に…。」

ふと気付くと本棚やデスクにも滯の写真がある。大学のときだった
り、最近のだったり…。

「おまえの写真なんかいくらでもあるぞ。28年も一緒にいるんだ。
それこそ、赤ん坊のときからずっとおまえだけを見てたんだ。きつ
と世間じゃストーリーカーって言われるぐらいにな。」

流星が照れながらぼそつと言う。

滯もずっと流星が好きで好きで仕方なかった。流星以外の人は考
えたことがなかったのだ。同じ思いを流星も持っていてくれたか
と思うと滯は本当に嬉しくて心にじんと熱いものがこみ上げてきた。

滯はもう一度振り向いて流星の胸に顔をうずめると、流星のぬく
もりを確認した。暖かく懐かしい思いで胸が一杯になる。そしてそ
こが、どんなことがあっても滯の安心できる唯一の場所であり、ず
っと帰りたい場所だったのだとあらためて感じて、今その中に
いられる幸せを噛み締めた。そしてその傍らで流星は大事そうに滯
を抱きしめて、同じくその幸せなぬくもりを実感していた。

9# (後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。

本当はこの話は書きあがっているつもりではじめたのですが、書いているうちにどんどん書きたいことが出てきて結局なんともなんとも書き直すはめになりました。笑

それedyouやくここまでできたのですが、ようやく次回が最終話です。

10# (前書き)

おまたせしました。エピローグです。

これまでお読みくださり、誠にありがとうございます。最後に後書きも是非お読みいただけると幸いです。

10#

） エピソード ）

その次の日、二人は互いの両親に本当の気持ちを告げた。

「はあ、やっとその気になったのね。あんた達いつになったらくつつくのかと思って最近ちょっと心配だったのよ。」

と滯の母が畳み掛けるように言えば、

「家の娘はいかず後家になるかと思ってそろそろ流星くんにせかそうと思ってたんだよ。」

と父も嬉しそうに正直な心の内を白状した。

流星の両親といえば、

「あんた、おっそいわよ。でも、よかったわね、あんな美人他に持っていかれなくて。奇跡よ奇跡！あんたにしては上出来よ。まあ、何はともあれよかったじゃない。想いが遂げられて…。」

と、母が弾むような声でからかいながらも楽しそうに言えば、流星の父は、

「長くかかったなあ。よく滯ちゃんが待ってくれたよな。おまえ、やること遅いんだよ。まったく誰に似たんだか…、まあ、よかったかな。おさまるところにおさまってくれて…。」

と穏かにマイペースでそう言って笑った。

最初から、周りは二人の気持ちに気付いていて知らん顔してくれていただけだったのだ。さすが親である。

週明けに会社に行くと、飯田はもとの通りどころか、ラブラブな二人を見て週末悩んだ自分があほしくなった。人を巻き込んでハラハラさせた上、勝手に仲良くなって…。それでも、なんだかこの二人は憎めないのである。二人とも愛すべき先輩なのだから。

そして、その週の水曜日。倉元がやってきた。倉元は何事ともなかったかのように、それまで話してきた企画に対しての正式な返事をくれた。さらにタイアップの話は別冊の付録として独立した形で、さらに当初より大幅にページ増とすることを約束してくれた。また、プレス発表時に滞たちスタッフとクノチアキ&結城ななえ密着取材を申し入れてきた。

あまりに何事もなかったように仕事に徹する倉元に、なんだか、身につまされて思わず滞は話しかけた。

「あの…。倉元さん。その節は本当に申し訳ございませんでした。」

倉元はふっと寂しそうな顔をした。

「いいんだよ。僕は君と言う人に出逢えただけで本当に幸せだったよ。なんだか、いまだに惜しい気持ちには多分にあるけど…。彼と想いが通じたんだろ？」

「えっ？あ…。はい…。」

滯がはにかみながらうなづくと、倉元は涼しげに笑った。

「なんだか、僕がキューピッドになって君達の縁をつないだだよなもんだよね。皮肉なもんだな。本当は昨日までは君にどんな顔して合えばいいのかわからず、随分落ち込んだんだ。でも、今日、こうしてあってみるとなんだか嬉しかったよ。君が幸せそうな顔して笑っていてくれて。僕も少しは君の役にたったって思えば本望かな。確かにまだ心は痛いけどね。」

「倉元さん…。」

滯は少し心苦しい気持ちで倉元を見上げた。

「さあて、忙しくなるぞ。絶対この企画は成功させて見せるから。一緒にがんばろうな。」

倉元はそういつて滯に笑いかけた。滯も笑顔で大きく頷いた。

その週末に流星の両親が滯の家に顔を出した。久々に夕食を一緒にということだ。滯の母が流星の両親を招いたのである。お酒もはいつて両家いりまじって、滯と流星を酒の肴にして盛り上がっている。

「うちの滯はまだ歩けもしないうちから好奇心旺盛だったから、目を放すとすぐハイハイして玄関から出て行こうとするぐらい、女の子のクセに勝気で思い込むとまっしぐらなタイプだったわ。流星くんがいつも滯の服を引っ張りながら泣いて知らせてくれたものね。ほんと、流星君いなかったら、あんたとつくに事故でこの世にいなかったかもよ。」

滯の母がほろ酔い加減で思い出し笑いをしながら楽しそうに話して

いる。

「おかあさん、もう！それ何度も聞き飽きたって！」

滯が真っ赤になって怒っている。

「あら、うちは滯ちゃんに感謝しているわ。流星ってば、昔っからほんと滯ちゃんしか興味ないもんだから、進学する時だって志望校なんてないに等しかったんだから。滯ちゃんがいく学校に興味があったのよ。ねえ、流星？滯ちゃんがいい学校行ってくれたから流星も自動的に行けたのよ。家としては感謝だわ。まだあるのよ。流星はほんとバカだから、就職の時だって…。」

「ばっ！かあさん！いい加減にしろよ！」

流星が真っ赤になって焦って立ち上がる。流星の母はおもしろがって話を続ける。

「滯ちゃんの就職活動を調べまくって、同じ会社を受けに行って、滯ちゃんが採用をいくつかもらったってわかったら、どこにするか聞いてくれて必死でたのむのよ。笑っちゃうわよね。ほかのどんなことも適当で関心ないくせに、こと滯ちゃんのこととなると俄然必死になるのよね。」

「かあさん！」

流星の母はそれでも面白がるように話を続けた。

「ほんと、あんたはあけてもくれても滯ちゃん一筋だったもんねー。これで他の男に取られようもんなら、目も当てられないわよね。よ

かったじゃない。ははは！あーすっきりした。どう、全部暴露してやった♪」

流星が真っ赤になって母親を睨んでいる。漣は驚いて呆然としている。

「偶然じゃなかったの？」

漣が流星に視線をやると流星は真っ赤になってバツが悪そうに膨れっ面をするとさっと目を逸らした。漣は流星がいつもすましたように自分の傍にいて、そんな気配はまったく感じたことはなかった。今はじめて聞かされた話だった。流星はずっと漣を見ていたのだ。いつも漣の傍にいたのに気付かなかったのは自分の方だった。漣はつくづく自分の鈍感さに呆れた。

食後も今だから言える暴露話が続いて、いたたまれなくなった二人は、流星の部屋に避難した。4人の話は随分盛り上がり、いつの間にか自分達の幼い頃の話に移り変わって行った。

「あいつら、当分飲んでしゃべりまくってるよな。」

流星が照れくさそうに笑いながら言う。

「うん、久しぶりだしね。」

漣が穏かに笑いながら応える。

「あの…、流星？」

漣は少しぎこちなく話しかけた。

「ん？」

「ごめんね。」

流星を上目遣いで見上げた。

「何が…？」

「だって、私が鈍感で、ぜんぜん流星の気持ちに気付かなくて…。でも…、すごく嬉しかった。流星も私と同じ気持ちだったんだって、わかって…。」

漣がほほを赤らめて照れくさそうに言った。

「ばか…。」

流星も照れくさそうに笑って、漣の唇にゆつくりとやさしくキスを落とす。唇を離すと漣の閉じていた目が開かれる。漣は流星をじっと見つめた。

「流星…。愛してる…。」

二人の瞳にはお互いの顔が映し出されている。どちらからともなくそっと唇を重ねた。二人だけの長く甘い夜がはじまる…。

「愛してる…。漣…。」

ようやく二人は心の糸を手繰り寄せた。溢れ出す想いを確かめるように優しく時を紡いでいく。いつしか身も心も溶け合って二人は甘

い夢の中へと落ちていった。

|| F I N ||

<お知らせ>

最後までお読みくださり誠にありがとうございました。

いろいろありまして、続編「素直になれなくて2」の連載をスタートさせました。

※詳しくは後書きをご覧ください。

10# (後書き)

皆様、素直になれなくてをお読みいただきまして誠にありがとうございます。
ございます。

いかがでしたでしょうか。

ラブノベからいらしてくださった方もこのところ増えているようで、
お読みくださって本当にありがとうございます。

また、多くの方から感想や暖かいコメントを頂きたいへん嬉しくと
ても励みになっております。

本当に感謝感激です。

お待たせしていた続編もようやく開始しました。今度は波乱万丈あ
って長編になる予定です。

まだまだ、続く「素直になれなくて」。

是非今後もお付き合いくださいますようお願い申し上げます。

皆様本当にありがとうございました。

では、また『素直になれなくて2』でお会いしましょう。(200
7.11.19)

篠原悠哩

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8285b/>

素直になれなくて

2010年10月11日00時41分発行